Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

南總里見八犬傳第二輯巻之三

東都　曲亭主人編次

第十五回　金蓮寺小番作讐を殺つ　拈華庵に東客と留む

前巻既に説破る伏姫富山へ入るより此八十八歳のとしに至るまで長禄元年の秋なり〳〵又金碗八道と大坊が嘉吉元年の秋父孝吉が自殺せしとを既に五歳なりけるに長禄二年富山なる伏姫自殺の憂ある係る猛く出家入道志す。郎を雲水に任じ手藪行脚の首途せり。

この時九二歳なりしぬ伏姫が年七歳なりしかば十七にして身ごもるとさまで大坊が姫よりその年才五の兄なりけるとかくて長禄三年のこと。寛正よりあらたまりて又六年まで。文正と改元せしなりと元年のこゝにて

山青堂蔵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ちかごろ三月末に村雨の降りそそぐなかを、ひとり蓑笠をつけて、ぬれながらあるき、ぬれながらやどりをもとめ、ぬれながらくつぬぎ、ぬれながらねまきにかへ、ぬれながらねまきのまま、ぬれながらねまきをぬぎ、ぬれながらあたまをふき、ぬれながらあたまをふきながら、ぬれながらあたまをふきながらぬれながらあたまをふきながらぬれながらあたまをふきながら

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ものゝ八郎一郎を合まる如く人の親たる慈愛おのづからなり。却説大塚番作ハ父の必死と知ゝ乍ら存命べくもあらずとそを爭ひも火急の折うり志父立んとて父の今果ゝ如死ぬせよ云所ゝ時を程しく親も子も虜とるゝハ後悔其処よ立ゞ一旦その意よ任さるとき又せんもべのゝごとやうとのゝとゝ死ゝたゝ思念しく躰て城中を脫ま出袖號を掻擲捨て髮ゝ素しく面を隱し敵兵ゝ雜ゞて両公達乃ち所在とさがしくゝ窺ひけるいひもあらさ孤ど君を必ハ公ハ必ハ父匠作ハとま日敵陣ゝ紛ま入まくく繆の為体を窺ふゝ春王安王のゝ抱ゝ乳管領清方ゝ後、車長尾因幡守ゝ生拘らま軍散しく後ゝ鎌倉へと伴のゝ一人匠ハ擂髮を裝容を宴しく先途死ん人とさる行よ五月十日ゝ及しく清方則長尾因幡守を警固使とし。信濃守政康を副使とし。両公達死ゝ乘こそよりく京都へぞ上せける。

さまゝ大塚近ハとのとゝゝ又政康ゝ後率ゝ清しゝ隱るゝ両君のもん供しまりとゝゝかくもして道中よく竊とりまゝせんと豫くゝ謀ゝるゝ宗徒の兵士二百餘騎四面八方をうちかこゝ夜ハ通宵本陣よ篝火を焼明し。戮隊の火長迭代よ夜行しく露だるゝと由斷せざれハ近件をゝゝゝゝ似ゝ子こゝ肺肝を摧くゝのゝ絶てその隙るゝ生けり。さるゝふ両公達ハ五宿六宿と旅宿とかさるゝ月の十六日ゝ青野ゝ原と過りゝゝ浩処よ京都ゝ將軍よりもん使ゝあり。両公達を今さゝゝゝ都へハ上そゝゝくゝ路次ゆくゝ絲しまゝ首級とのぼせよと佐郡ゝ下されこゝと長尾ゝとゝ死兼りさゝゝ矣濃路ゝ樽井の道場金蓮寺ゝもん輿を扛入まさせ。その夜住持を戒師とし。敢のゝくゝ形ひ矢来の四面ゝ

山崎文庫

舟火焼しく。春王君安王君を敷草の上ゆ推のぼ〻く。軍期のより公告
なの。嘆息しつ〻退けバ住持ハ念珠揉ぶ〻ち。間近く進こて叮嚀ゆ十念を
授たまふ。春王君ハ大人〻く。安王君ゆ〻ち對ひ因ゑ上とのり〻その日よりこ
かるべしとかのくそ志ゑとぬ。ゆくバ前月結城ゆく。氏朝をちがめとく〻。
こゑとゞゆ討死せしいくそ。の武士の初月君ゆ周ゑあひつ同胞がその
日ゆ死ぬるせゆてものゆ罪滅しゆ行ゆ〻。かゆ〻しの數死ゆとのゆ〻ゆ
ゆくべうち京武西方とゆう浄土とゆ〻ん。又上毋君まゝとゝ人が海てい
へバ。一死〻く。ゆ〻こゞゑと親し遭ゑるのゆなゞバ何ゆ悲ゑ行ゞ死ゑゆ。冥土
の路ちゞゞ。のゝ心ゞそく。行り。後ゑゆゆ後ゑ。と迷ゆ凍め徼ゑ。
驚ゞ〻る氣ゑ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ

怒を報ひく
番作君父の
首級とかくを
大塚番作
牡蛎崎小二郎
ゆきの頭二

べ。両公達の小頭顱ハ微と地に落て。函低吐嗟と冊繰世警固の武士を
蹤踰く。矢来の内に跳入て。両公達のちん傳。犬塚函低さゝゐあり。怒乃
刃受とやゝ怒の大音名告らけく。二尺九寸の大業物抜き尖く錦織頭
巾。二ぐ肩尖より乳の下まで。ぐさと砕仆せば。牡蛎崎小二郎大塚ふ
驚き原来癖者脳さゞと合ふる血刀閃く遽くぬるとう人。函低が右の
脇水も滴ぐど砕落て。弱ふとろ公畳ふけく。細頸裝石とうち落せば。
陣笠被さる一個の雑兵。群左さらぐ兵士を推ふけ。拙ふけ。瓶ふが如くふ
失来の内へ進入ふとく。両公達のちん首級と。左ふ髻掴ふ世函低が
首さとりあげ。既髻を口ふ楚と銜えく。先ふるぐりふ腰刀ぬくふを
ふせど牡蛎崎を。乾竹割ふ砕伏ふ。ひとけるふるれば。二百餘人
の兵士ふ。あまたのく。と散動くのく近ふ呆まとくせんとぐ。ふを遠ふを

前ふ。人ふ。ふとく。左右ふ。ふ進ふ。ぐ。その隙ふ。件のその二ハ陣笠ふ
ぐやふ。撥遣。乗持。氏朝臣。恩顧の近臣大塚函低。三戍ふ一子。番低一戍
十六歳。親の教訓固辞ふて。戦場ふ。腹ふ。ふ。ふ。父ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
亦君父の先途。死。ふ。果ん。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ

方ふ[illegible]とかるとゞ焼つゞけて[illegible]蕉火冊火とゞまるふうち滅さる時一も皐
月の天ゐるとゞ昏の雨雲いやかさるゐりく十六日の月ゑんぞ如法暗夜と
ゐるとゝ長尾ゞ士卒ハ同士撃して痍を被ゐおもく〳〵ヨゐゐ番兵を
この光景ゐ天の祐とゐよく乱ゐるく撃〻轟〻殺用を矢来の外(郷)と
出くヨゐ勢の中へ割くハり透ゐ賊ハ墓原ゐる藪を潜ゐ溝を飛ゑ
往方ゆへ[illegible]ゐ[illegible]ゐけゐ現由断大敵ゐく事ゐ熟ゐる長尾ゐれた
名劔の奇特ゐより冊火さゐゐ滅ゐ[illegible]ゐ癖者ゐる搦ゞ剰春王安王の
ゐん首級を奪ひとゐゐ面目を失ゐゐ[illegible]ゐゐゞゐゞ
京都へ使者とゐるゐせくゐ且室町殿軍へ縛の趣ゐ所ゐゐゐその夜より
八方へ部〻く日毎ゐ番兵ゞ往方を索求ゐどゐ[illegible]ゐゐゞゐゞ
ゞゐるく徒ゐ日を送るゐゞゐ京都へゐ[illegible]ゐる使者ゐゐゐ来て[illegible]教

書ゐとくゐゐゐ出ゐゐ因幡ゐ恭しく受ゐとりてゐるゐ共ゐ拝見をゐ
略ゐ春王安王ゐ首級を奪ひとゐゐゐ大ゐゐゐゐゐ越度ゐゐゐ。
既ゐ洪果ゐゐゐゐ益ゐゐゐゐ国家のゐゐゐ害ゐゐゐゐゐ
長尾因幡ゐゐ今度の軍功ゐ換恩食ゐゐ罪を宥ゐ鎌倉へ罪
下ゐ清方ゐ告ゐ色残堂穿鑿ゐゐ者也仍執達如件嘉吉元
年五月十八日斯波義淳等奉ゐと続あくゞ長尾主従微笑〻く
ゐゐゐて安堵のゐゐゐゐ躯をゐゐゐ欲ゐ殺ゐゐ
士卒の亡骸ゐ金蓮寺ゐ葬果て次の日樽井と農足〻鎌倉ゐ投て
還りけゐ長尾ゐゐゐゐゐゐの下ゐ結ゐ〻案下某生再覩大塚番作ゐ必死
の覚期ゐ忠孝の誠を獲ゐせゐゐゐゐゐゐる神明佛陀の冥助ゐゐゐけんかく
一條の血路ゐ開きく金蓮寺ゐ脱ゐ去東を望く終夜ゐゐゐゐゐゐゐゐ

山路のことけ入り樵夫のかよふ細道をたどる〳〵天を明し次の日も猶憩うぐ。
只管ふ走る程ふ十七日の黄昏ふ吉蘇の御坂のよろこぶる夜長嶽
の麓ふ出ぬ。この行程を数へまへ樽井より北餘里三十里ふ疲るべしよつ
ぐ追人ハかゝらじとそくへ忽地ふ故〳〵く足の疼痛酷しとよろこび勇
へ久まで浅痍ふまとも五六个所鮮血ふ衣ふ浸とぶ如し加以昨夜ふ
飲ま食つぐ走りふけまで心神倶ふよいく疲労まく一歩も運しがた
ふ。表ふ激しく道次ふ立ふ息ハまど若ふ元を隠さんそ苦痛を
忍びく彼此と便宜の墓所を求るふこの辺ハ里遠ふ山ふて孤ふ
雲近く峯ハ翠ふ水皓ふ向上まで青壁〳〵く削るごく直下まで碧
潭鑿〳〵く穿ふ仰ぐ。月ふ視る佳景ふ感ふ心を
とゞめ〳〵ふ嘯ふる松風ハ追来る敵の声かと疑ふ哺ふ鳥語ハ憂ふ愁
む交ふ〳〵ふ。山路ふけ山路ふ。山道ふけ〳〵く〳〵ふ。十七日の
月の影山の端ふ升る。樹垣ふ〳〵締遠〳〵ふ白屋の庵ふ〳〵ふ。庭
門の渚折戸ハ半扇折失せく荒〳〵ふまの孤館ふ。今宵ハ〳〵ふ足を
休めく一碗の粮ふを乞めとそくへ庭ふ進ふ入〳〵ふ月を燭ふとそ〳〵ふ。
〳〵ふ一宇の田舎道場〳〵く持佛堂とおゞ〳〵ふ檜ふ檜の輪板を額ふ。
扣堂庵の三字ふ掛〳〵。そふ漏雨ふ磨滅〳〵く幽めぞ続ふ其ふ
よりとそ〳〵ふ墓所ふ〳〵く石卵塔ふまさふ。番地つく〳〵ふ。君ふハ
頭顱を塵ふ。〳〵ふ完ふ竟の孔ふまで明く地ふ由を告ふ。もそ〳〵く
かゝふ〳〵ふ引べふ〳〵ふ菴主ふハ〳〵ふ甘ぞ〳〵く葬ふ果ふ後ふ〳〵ふ白
乞めと深念〳〵く足を翻潛ぶ。ふ。あちこち〳〵ふ覗けば持佛堂の傍
子の下ふ一枝の鉢ふ〳〵ふ物ふ獲つと引出ふ肩ふ〳〵ふ掛〳〵墓所ふ

起。扨て何処より菊人と左道衣遮を見て久まで新菊とあぶりて石を
居ざる一座の塚あり。このほとりの壊ちこちらあく掘獲まふ便りとあけまで。
この新菊と推並べて。ちふまふ完を掘て三頭を深く瘞めて。舊乃如
くふ壊ち捩ひ跪ちて合掌し。念じ果て身を起し。鍾さん簀子のちさへ
逐ひよ裡面まふ人のあるやうや。維と呼ぶる声もせどかくて庵堀のあふ
立より。ほとゝと戸を敲たく。喃とこの菴主よ菊ヤさんとまふ山路ま日を
くゝ〜く。餓つまてる行人より。素より慈善をあるじとまふ道場とそ
ん者れ今宵ふあるさせまひ伝。といひつけく戸と推開けふ菴主とあぶ
ちたのふたをくぐ。ちひぐちまた一個の女子。その年ハ可二八歳こふあれど
麓蘭く。露ふ谷ま野の花の。白とぶく風情まく。独孤燈まさ〜對ふ人
まちらびまるあり。ちまるぶ今番作ぶ門更ぎ戸を推開く進へる。

その為体の異ふるふ駭ちあそまてく應答ハえ甘ぶ。ちるまも呆れてち
目戊まふ。ま子ハひとぐ堪ぶやあるそん徳と主く納戸のふ人避人とまちふ
番作ハ慮〜く喫とぶ。女中さのまふ駭ちのひそまふ山容夜盗ま
あふとぶ。きのふ如此このとちまふ〜く。親の仇人を撃果〜。更ま仇人の援
ひを投駭く来ふるのふさまふハきのふの仇ふく餓労まふくちくと
かのふぶ一碗の飯ふ恵まく。宿を行〜ふふ再生の洪恩ふ。吾
つもだふまも野心ふ〜。疑ひふ釋ふぐう〜とひふ渝ふ腰力を右ふ取て
後方ふ推遣り簀子の上ま進登まふ件の女子ハあそふく。行燈の灯口
ま向く番作が形容をつくとまふ〜く驚息〜。尚年少ちち方ざるの能言ま
撃ふのふる途の難義ま枚ひ出へぶ只一碗の糧ま惜て強請数待ふハ
あふ孤ぶあふまふが宿所ふ行ふぶ。ちまふ道場ふの固ふ田舎の

事なるに庵主の外よる成る人なく鄙みすてゝ亡親の墓系のたゝりに行
つゝ紙庵主の法師ゐ喚とゆゝ主よくてそ来つるかゝる事ふこく貪道ハ大
井の郷までゆくゑ黄昏ゐハ久人とまるゐ。たゞゝが程ぞ留守してよとゝハ
るゐ固辞ゞくく。跡あゞゐるゝく悔ゝくと今ゝくと俟ゐどゐ日もたゝや
暮さゝるゝゐ捨てかゝるゝ還ゝるを。せんもゞゐるゝゝか。ゝゝ飯ハ
あるゝゐゞゝゝゝハゞゐ紙ゐ任せゞゝ。といゐ紙番祇仏のあゝどいゐくゝゝろ
理りなるゝゝと庵主の還ゝ紙ゐくゝんとゝく。轍鮒の窮を救ハれゞゝられ
ゝる枯魚の市ゐ售ゝん人を救ゐハ出家の本願。庵主ゐ為ゝるゐハゞ
ゝも何久さゐゞく登ゞ尚べゝゐゝ久ゝるゝくゝち腹ゝたゝ為ゝ合にてゐん
身を叱ゝゞ某ゝゝくゝゐハ糴ゞ任ゝく餓渇を救ゝゐくゝとゝ求るゐ推辞
ゝく山折歟ゐ麻布帛ゝち揖ゝる。庵主の碗をそゞまくゐ番祇ゞゐと

ゝるゐまゝゝく山擔ゐ藤籠せ。飯椀をゝゝゝゝ堆高く盛ゝゝゝゝ乾菜
まゞゝの魃麥ゐ時ゝゝゝゝハ美味珍膳皿ゝ塩盈玉味噌ハゝゞ口濡を
はゝゐゝ椀の飯食渇るゝゝて愉く食ゝ畢ゝゝく欽ゝゝゝ紙述猪おゝ
遣ゝゞゝゝゝゐ子ハゝゝ納めゝく中ゝ客人餓渇ハ救ゝゐゝゝゝ庵の留守ゐ
ゝるゝゝゝゝゝ共ゝ今背を曉ゝゞ人の疑ゝ紙ゐゐゐ。ゝゝ出ゝ人。
と強面ゐゝ紙耳ゐゝけゞ袖ゐゝあゝく臂ゝ伸ゝゝ足ゐくゐゐ数个
所の金薬ゐゐゐゐ臥房ゐ寝ゝゝゝゝ何ゝ紙ゐゝ侍べゝゝゝ。ゐ疑
ゝゝ人ゐゝゝゝ人枉ゝく一宿曉ゝゝゝゝ人餓ゝゐ腹成蹈ゝく。ゝ今一ゝゝゝ疲労を
ゝく一歩ゐゐゝゝ夏の夜ゐゝゝゝ短くく。初夜ゝゝゝゝゝゝ庵主ハ
還ゝゐゐゝゝ枉ゝく一宿曉ゝゝゝゝ人と他ゝゝゝゝ。ゝゝ見ゝゐ推辞ゐ後ゝく
歎息。ゝゝゐ便ゐゝゐゐゐゐ

ちんぶがあるるに任せぬ。ちうくあるとぞ。容厳といふあるもの。枕辺
つけく本堂の山まで。今霄紙曉。山里のとりなるに。蚤蚊の絶くをたぬ。
とふるに番僧うちそく。理なく宿をとゝ得ぬ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
畫。ゝ。ゝ。滅。女中の賜ものゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
子ハ鮫く指燭。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
隔亮推。ゝ。ゝ。持佛堂へぞ寝ぬ。

第十六回

白刃の下ゝ鸞鳳良縁を結ぶ
天女乃廟ゝ夫妻一子を祈る

却説大塚番僧ハ浅慮多。とゝ一昏夜驚の程を。ふけ。ゝ疲労と
とゝ。その殘痛。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
がく。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

山院ゟ宿
番作
東ゟ嶽ふ
庵主助牛
白牡丹
火
菩提羅闍多
菩尼舎新宅
入塚番作

女子へと且弧禁あくまで髪ふつと奈ってよゝと法害心眼ゐ頭然さる為体ゐ番仏ハ
聊も疑つゞ紙ハを丁と蹴まくれ。庖湍のくゝ跳出山賊と紙殺さん欲
つゝ且ゝ汝を殺さゞゝと罵あくまで為かゝ且ゝ悪僧大死ようち驚死舎とる
刃を閃くゝ砂人とを為巻の下を潜ゝ脱々足紙為ゝ腰眼のあゝ紙
徼と蹴る蹴ゝ且て前へ倒よろくと五六歩走ゝ生ゝ。かゝゐ踏駐ゝ
かくゝ突かくゝ紙右へ流ゝ左へ走ゝ。数回ゝ。悩ゝ。疲労ゝ紙つけ入りく。
竟ゝ刃をうち落せゝ悪僧いよくゝ慌ゝ逃んとゝ且ゝ番仏ハ薬刀を
だゝくゝと揚ゝ賊僧天罰ゐひゝ且ゝと罵る声とゐろ共ゝあゝ倒せゝ
刃の電光脅倒紙ゝ驚ゝ。癪所の痛痩ゝ。霎時も沼堰ゝ悪僧ハ苦と
叫びゝ仆ゝ胸膈ゝ免の刀尖刺つゝぬ紙ゝ引抜薬刀血を揮ゝ且て刃と
拭ひ。滝ゝ逃ゐ紙伏沈ゝ為女子ゝ斃くゝ眼紙瞑ゝ一声をゐり立

汝ハ甲夜ゝ飯を惠ゝ。一碗の恩あるゐ似ゝゐ。又賊僧がかくゝ為ゝ紙れと殺
さんとゝ為紙禁めゝとハ側隠の心ゐゝとども。との賊僧が妻とゐりて紙まで
くゝゐ人を殺せゝ紙ハ亦ゝゝ紙ゝ。されば脱きぬ天の縁速ゝ首伏ゝく。
刃を受よくゐぞや。と問ゝて僅ゐ頭紙挙。その疑ひハ情由ゝゐね。ゐ者が
心の表ひゝゝ紙ゝ固ゝゝ怒ゐゐめゐゝ。といゐもあくまで冷笑ひ浅
くゝ口を左右ゝゝ時を根ゝく小賊ホゞかくゐ紙まちゝく夫のくゐゐ。
紙紙復人とゐゝ汝が胸中。且ゝかくゝゝの伎倆ゝ乗んや。告ゞへられて
いゐ世人と打晃を菜刀の光と共ゝ紙退紙ゝ侯ゐくゝゐとあゝとゐゝ聴ぬ
忍の刀尖何ゐまでゐと黄縁を刀頭ゐ指ゐゐ竹の雪ゐ折ゐん風情ゝて右
紙紙伸ゝ左ゝ紙衝片勝ゝく身を反ゝゝ後ざゐゐ逃ゐ紙番仏ゝゐ
逃さゞと髪べゐゝ紙拂紙沈ゝ立ゝとゝゝゝ頂の上ゝ閃く氷の刀脱ゝくゝゐ紙

懐へさし入て問もあへず砂人と進む目前へとゝ出て一通つゝたけなくことゝ疑ひ
散しゝ彼ゝなのやと西のゆゝ引延しゝる命毛の筆を示せしその分れ素
姓番作得と透しゝてゝ直しゝ立ゝる書状の名印
梵妻賊婦が艶書欲とゝふゝ似ぞる男士の遺書かうてあらあそのの
情由弟と身を知うゝ刀を席薦ゝ突立ゝ膝折敷ゝ目守ゝをゝ。
當下女子へ一通を巻おさゝゝゝ目を拭ひゝゝ分似けるゝ道場乃留守
ゝ間ゝ今宵の尼難搗ゝ加てゝん分がゝゝゝ出ゝゝゝゝゝ理ゝゝゝ今ゝ
？
匿むゝよゝゝゝゝゝ抑ゝゝゝゝゝ坂の人氏井丹三直秀が女児ゝゝゝ束と
鳴ゝゝゝゝゝ父直秀ゝ鎌倉殿持氏の恩顧の武士ゝ分ゝゝゝゝ持氏朝臣
のゝん滅亡両公遺ゝ結城の城へ肩篭らせゝゝゝゝゝゝゝゝゝ坂とゝゝ
起ゝ勢徒ゝ十餘人倶ゝゝ結城ゝ馳加ゝ合戦年成累月ゝゝゝ孺君は

武運ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ月の十六日ゝ結城の城を陥さゝゝゝ名ある人ゝ
ゝゝ共ゝ父直秀ゝ弟ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

きくの。ものとも恋のこと。なんとうたうとうたうとうたう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

妹伏といふ人もなげうつるばかりけなげなりしかば存亡をあく寿と共にせまほしく存じ
情願へるをぞとて秋ふかく世のひ花とのびあくを顔ばかりも掩へ兼ねて
感嘆しかくまでもふ男姑塚を並べて西公達の遺骨を守るのみなるべき約
束かくれ妹と伏よ濯會せのひぬること是将親のその元魂の償元のみよ疑ひ
なしかはんみ身を携へて深く深世を潜べし然るべきに親の変ありけ
夫妻といふんもむるべ十二月の服果て又更めて夫婦とならんと仏法よ
ふ東へいち点ぜしをを如右ぞ思ひ行る。あん方既よ蚊牛法師を殺し
多べ人もぞ思ふ人後の決意なるべきぞやいかに思へば御坂ろ家みを
伴ひぐし信濃なる荒磯ひあ母ぐこの由縁あり特よ亦彼処の温泉を力
瘡よ効あるとぞ人むし浄見原の天皇仏湯よ行幸あるんとて輕部朝
臣足瀬等よ行宮を造じ多べ今を伴湯とぞ唱へ行る漢見へのたふ

荒磯の里へと勧ぜ番作とぞふ隨ひて。天あけぬ待ふとのそぜつ。更ふ
東を伴ひて北華庵を走り出ぬ。王僧ふ五六町遠よ後方をとり見ぬ
道場のうふ火の見出て。中く先ぞあるけり。ふ東へ二ぞ驚ぞ
あよ紙やり。出ると見よ心慌て火ぞ滅さぬ過失ぞくけりとち
呼く仏番作はあ人ぞ笑ひて東さのくる驚ぞのしそ北華庵へ
山院ふく深ふ遠ぞ住境るぞとも乱る世清僧稀ん彼蚊牛尚嫌を
貪り漫ふ不良のふる仏起せり渠ぞ一ん卒ふ山賊の巣とる心
とぞ伏ふけぞ出ると見埋火を搔起し障子襖をよせりけ
り彼庵室へ火ぞ灰燼とるとつる蚊牛寛よその罪あり但渠ぞ
欲ぞ為遂ぞ思ふ。憐むべきあるぞ。どいよ前と
せぞ。ぞ法師を火葬しふその聖ぞ一ぞの老婆ぞ

山青堂蔵

その月の晦日四十の月代えの髪をくなほしと鳥の外よ注
乳母が一度送りとて、標の石へ苔蒸せども残るものへ稀なる乳かく
亀鶴へ情願の如く墓六と夫婦よりとく一両年を送る程ふ嘉吉三年
の比うとよ前管領持氏朝臣の李のあん子永壽王とやせ〻へ鎌倉滅
亡のと乳乳母よ抱き信濃の山中ゆ脱き都の安養寺の住僧ち
乳母ぶ兄ろろ氏ゆく精悍〻くとめし潜笠の近臣大井扶先と必氏
合〻〻年来養三月ろろ上鎌倉よ風聞せ〻ば管領憲忠の老臣長
尾判官昌賢と東国の諸将と相謀て遂よ鎌倉へ迎とて七八
州の連盟と仰ぎ奉て則元服させゆろ左兵衛督成氏とぞ申し
けるさて結城ゆく結氏せ〻家臣の子孫氏已出させゆろ（ゆろ元〻八又渡ゆく
山墓六へ時氏ゆろ。飯頃よ大塚氏を目〻鎌倉へ参上〻氏

濃の樋井ゆく対面せ〻ゆ。兄春王安王両公達の傅さる大塚近代が女婿ろる
よ氏所ゆく恩賞氏乞〻ば昌賢ゆく豊嶋ろる大塚へ人を遣〻鎌の虚
実を糺明せ〻ゆ近代が女児よろろる既ゆ分明ろり上へ墓六へ人とろり。
武士ゆろべ氏めよあ〻孫へ僅ゆ村長氏命せ〻て帯刀を許さ氏ゆく八町四
反の荘園を宛行さ彼地の陣代大石兵衛尉が下知氏兼て勤むべ氏旨ゆ
仰ぶ所是よろろ墓六へ尾廂よ衡門ゆ造り建ゆく奴婢七八人召使へ世
客人を饗遣ゆ。ゆろ田へのゆ水さへ引バそゆ久後へ老ゆ孫ゆ子豊ゆ代人よ
ろろ氏ゆく不頭大家番作ゆ成へ曩ゆ東を付ゆく信濃の熊響ゆ延
きろゆ。ゆく湯治ろる程ゆ足の痩へ痩さ氏ゆ胸の筋や縮ゆ名人ろり
行歩自在ろるゆ。よろ氏ゆ一年ゆ程ゆ遣る程ゆ父の
要へ果ろるゆ。ゆく武蔵ろる母を呼ゆ今茲へ杖よ携て大塚よ赴入と

ゐるの甲斐なくこの夏は瘧疾に犯されて秋盡るまで頭あらぬ憂苦の中の年月ながらく。嘉吉も早三年ぬぎすてゝ世間陝死者をえつまつる大塚と告るくさこの憚なくもあらず流涙の貯禄既に竭果てゝ。ふたゝび抗春王安王のあん家永寿王成氏朝臣長尾昌賢が討ひまそ鎌倉の武将と仰ぎ戦死の家臣の子とあらぶ彼此に潛居る氏呂助ひとりの孔雀の温泉に湯治をゝ行客ホか物くるまこと風声大きゝ多ふ番作夫婦はゝ〻敬ひ今は何の時八ゝ候人幾行歩は不自由なるまゝとかくもあらく武蔵へ起死回生と称ふ對面くいの由に鎌倉へ推参し春王丸のあん像見相所のあん佩刀を成氏朝臣に献まて父母の孔雀ながらえ

置井直秀が忠死の逸死告なりまつる。進退窮君に仕せん然ハとて夫婦憂へ起行の准備しく手束はゝ死業し由縁の里人ホ別死告る。武蔵の大塚ぞ知むれ死多さゝ且番作ハ。其脚蹇ゝ杖をかゝ道まぶら女房も束に扶掖ま教町ゆくまく朝八三四里ゆく日をゝふ日数積まるく八月に信濃死出ゝ三十月のゝまゝ及ぶ。舊里近くまゝ番作八人くまゝ世の人ゝ郷より出ゝまゝ白屋に立ゝ大塚に作ゝ八人の妻ゝ女兒八恙ゝやゝと外ぶまゝ川ゝ亭主とぶゝ羽稽扱ゝ夫婦とゝ原来和達八彼方ざゝの幾迹ゝ世親八為まゝゝ二年あまゝ年ゝ病者を看ゝ八せぶゝ女の子ぶ不孝淫奇八告ゝ傷痛ゝ文皆弥ゝ山墓六八瓜彈せぶゝ破落戸ぶゝ入ゝ箇様ゝ由緒をゝ行ゝ八町四反の住園をゝ刀をゝ今ゝ村長死ゝ

大塚墓六とのふさをみ宅地ハ花桐のおもてに如此とのみ刻ミ上叮嚀に綴じぞ。
番作父あへどこうち孫墓きこの仮幼亀條が為侍墓六が人とあり之詳に同書
ちゝく外面へ悪死出ぬ東ゆゑ共言葉ハ多くく頻に涙さしぐこけ生しく番
作ハ杖をやゝ付て嘆息し分の病著とハひろのぐ。ちゝてや筋疲ゆ年父ゝ拭て。
母の終焉ハあへ去ぬ如以父が忠死を墓六とかゝゆ掠ゝ大塚の苗字を
機さる今とのより父祈人ハ村両の宝刀ゝ為ゆ勝利疑ひ多とハ今。
栄利のゝゝ姫と争ひ骨肉攘を聞ぐが如死ハ己が生ぬ佩刀を嫌
倉殿ゝ献ぶ己ゝ姫ハ不孝の人ゝ墓六ハ不義はて冒り遺言ゆ死夫婦ハ
ゆゝ仏ふべうとぞいぬ。さゝあふぶやと性けが多東ハ涙を拭ゆのゝそ死理ゝとゝ
ゝ移ゝ慰ゝゝ日父あひ斉一嘆嘆をゝりけゝ生ゆゝゝ番俗ハ墓六許
刻ゝ故老の里人ホを言ゝゝゝ妻のゝゝゝゝ為ゝゝゝを告赤乳父

説示ゝゝ親の墳墓を獲人為との地ゝ復ひせんとの人里老ハ番俗が薄命を
あゝゝて愉くゝ引つ彼此人を召集合く件のゝ父ゝゝゝゝ裏皆父を
遺ゝ幼婦をゝ村ハゝゝゝ大塚氏の采地ゝ。一旦断絶を為とのゝゝ本
領安堵の今ゝ至ゝく実子ハ日蔭の花と凋ゝ姉夫ゝゝひゝゝ破落戸の墓
六ゝゝゝ横領ゝゝゝゝ

けんかうらんぼうをやくすれば、ものしれぬ国ぶいへいのこと。

ものしれぬ国ぶいへいのこと。

ものしれぬ国ぶいへいのこと。

もとのごとくこゝに村に措くて。他郷へ去ぬべきの
某寔に不肖の身なれども父とゝもに箕城にく主君の命に惜わず戰場
にく死さるとの君父の先途死ぬるを見てそ揚井にく父の仇を
報とあらく。君父の首級死隱しまゐらせ給ふ親の結ひ〜女房こけ寄ふ
名告あらて。紀麿の御湯とゝ殘を保養〜。僅に平愈ぬるとて行歩不
自由なれ〜。長途に堪ぬ。去歳八月長病に一年を化るとゝ。今茲再ひ
あり〜起して。杖に携ふ妻に扶ぶ。稍まく仰のけハ母の終焉ぬ。嘆の不孝
深奇人のよく共国にてゝ。嫁夫柄ホの刃あるて重職をうけ給り大福
賜ふ人見ぬ。ぬ。某父の遺命よりく。春玉君の命に仰て村雨
の一腰を領ふ。ぬ。ぬ。ぬ

庚申
女かみと
猿ぢつ
東ひと
神えん
塚つ

黒ホ世尊の[illegible]死[illegible]ふつけくもぞ薄命ハ數くふ足らぬ只、後
ヲ死ハ不孝とまそのるホ女房ヲ東を娶てより。十四五年ガ間ヲハ男児二人
まで産せることども禍福の中ホうのくなるとく一人とく生育めのるーこれと
ヲ東ハ同庚まて果て三十の齢よりとう。又子をこんの難ることを
送憾とハふ嘶ガまり死夫の述懐ヲ東もあるでうふみまハ姥捨山まつる月
なるぶ。ふかく愁ゆさるガ。忽地よりそふ。瀧の川ヲ辯才天ハ[illegible]
ヲの国古廟まく。霊験あるとハいふる。祈らバ應報なるとそんぞ
ゆて夫ホ告て次の日より朝ごく起て。件の朝ヲ日参し。一子を祈ることハ他
念ヲ。今茲長禄元年の秋[illegible]
日ヲ懈らぞ。時ホ長禄三年。伏姫自殺の富山のあくへ入り。三年ガ間一子
時ハ[illegible]明[illegible]月影を。東ヲみホ[illegible]宿所を

ホく瀧の川ヲる岩屋殿ヲ参詣。既ヲ下向ヲ赴けども。その夜ハいまぞ明
ぶとけり。銃まゆ。とゑりぐちく稲ヲの露ハ搖拂ひて。立かゝる田の畔ホ。
脊ハ黒く腹ハ白ハ拘の子ガ棄られ[illegible]ヲ。
ヲ東ガ裙ホまろ追久せバ又墓ひまて離ぶるもあぶれ。めてあほつ
立駐ヲかくまで人を墓ふのハいろる居人ガ棄さり久ん。ハ[illegible]牡狗
ヲり。狗ハ駄の子を産ヲのまく。その子ハかるぶ。月めえよりて赤子の
枕辺ヲ狗張子ハ置ぞ。神ヲ歩ハ運ぶまく。一子を祈るハ[illegible]
でるの[illegible]を拾ハざるんるく。かくるん。と知りごちて。抱きとるんとる折ら。
[illegible]ホ髮鬟と紫の雲ヲる引く。地を走ると遠ぶぞ。とるんぶ嬋娟ヲる
一個の山嬢。延の宋玉ガ夢ヲ見ヲ。神女の俤ハとぐる。魏の曹植ガ筆ヲ託
ヲ。洛神の顔ハんるく。黒白斑毛の老犬ヲ尻ち掛左ヲホ数顆の孫ハ合ひて

青堂蔵

有りける東を招き入れ、舞ハるゝ一ツの珠を投與のゝ人ハ今まで
奇特を見るゝ。あるゝ犬つれゝ来るが遠くゝ伸るゝ。件の珠を受んと
せるに珠ハ股を潜て猥こと雑物の不浄に落しゝ其首ゝ彼首と索ても
索ても又あることゝ。ある時とでゝ神ゝ霊忽地延
るゝなりて。神女も共に見えゝ平度みあるゝとゝ。みるゝ雑
物に抱たあげゝ。宿所ゝ還る。件の縛の犬番他よつげて
いかゝ拜ゝの神女の姿ハ山姫といゝめゝ。辯才天ゝ似るゝ。
授けゝ。殊ハ子孫であるゝ。ゝ取失ひ給ゝ願望かゝ
祥ゝ。ゝ。ゝ。